

# 学生有志による地域の子どもたちを対象とした遊びの活動

## — 6年間の活動の振り返りと今後の課題 —

吉原さちえ\*1 ・ 知念嘉史\*2

Play Activities for Children in Regional Areas by Student Volunteers:  
Retrospective of activity for 6 years and future issues

by

Sachie Yoshihara and Yoshifumi Chinen

### Abstract

Commissioned by the Prefectural Board of Education and in collaboration with the Kanagawa Children's Smile Wave initiative, the Tokai Smile<sup>2</sup> Factory is a program provided by faculty and students of the Department of Physical Education at Tokai University. In line with the prefectural initiative's goals, the program has continuously provided opportunities for interaction between Tokai university students and local children for the last six years through a variety of outdoor and indoor activities aimed at making children smile. The program has done this by offering outdoor and indoor recreational activities each month, including summer and winter camping programs lasting two days and three nights. The program was also created in part to addressing social issues such as bullying and violence among children through these exchanges that were of great public concern in 2012. Thus, this paper outlines the social issues that led to the creation of the program, focusing on the public's interest in bullying and increasing violence among children in Japan society. The paper first shows how the public's interest in such social issues led to the prefecture's efforts. Next, the paper will show how the efforts of the prefecture led to the Tokai program. Lastly, this paper provides retrospective of activities of the Tokai Smile<sup>2</sup> Factory for six years and examine the activities from the following four perspectives: the purpose of the activity, the Activity fund, the activity announcement, and the student staff.

---

\* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

\* 2 東海大学体育学部生涯スポーツ学科

## I. はじめに

東海大学では学生有志と教員によって、大学生と子どもたちの交流を通して、子どもたちにとっての居場所づくりを目的に始まった活動が、2012年からこれまでの6年間、継続的に実施されている。現在の活動は、大学内で月1回(第3土曜日)、大学外で夏と冬に2泊3日のキャンプを、合わせて年間12回の活動を展開している。活動開始時期であった平成24(2012)年は、子どものいじめ・暴力行為等が社会問題の一つであった。そこで神奈川県では、大学生と子どもとの交流を通じて、双方ともに、自分がどれだけ大切な存在であるかを認識させることを目的に、県内大学の大学生と地域の子どもの絆づくりに役立つモデル事業を募集した。事前に事業の委託依頼を受け、応募し、『かながわ子どもスマイルウェブ県民参加型事業「大学生と子どもの交流モデル事業」』委託事業を引き受けたことが活動のきっかけである。

本文では、今後の活動継続に向けて以下の4つの観点に着目し、それらを検証した上でそれぞれの対策を提示することを目的とする。1つ目は活動の方向性を定める活動目的について、2つ目は活動運営において重要な活動資金について、3つ目は参加対象者に対する活動告知について、4つ目は子どもたちとの関わりをもつ学生スタッフについてである。目的を達成するために、これまで実際に活動してきた記録を丁寧にたどり6年間の活動を振り返り、詳細な記述を積み上げる方法をとる。具体的には、当時の社会問題に対して神奈川県での取り組みを記し、東海大学では実際にどのような活動をしてきたのかを活動当初から現在に至る資料や記録をもとに明確に記述する。

## II. 社会におけるいじめの問題

平成24(2012)年度当時、いじめが大きな社会問題の1つとなった。そのきっかけとなったのは、いじめを背景として生徒自らが命を絶つという事案が起きたことである<sup>1)</sup>。文部科学省では、昭和60(1985)年から毎年「(新名)児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸活動に関する調査、(旧名)児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を実施し、いじめの実態把

握に努めている。昭和60(1985)年から平成17(2005)年まではいじめの発生件数を、平成18(2006)年からは認知件数を把握している。この調査<sup>2)</sup>において、『いじめの定義を、個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うもの』と述べている。また「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む。)であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」と定め、加えて「起こった場所は学校の内外を問わない」としている。いじめの認知総件数は、平成24(2012)年に198,109件であったのが、平成29(2017)年は414,378件で、2倍以上増えている。これと同じように増加傾向にあるのが小学校での件数で、平成24(2012)年が122,734件、平成29(2017)年が317,121件であった。

このようないじめの問題に対して、未然防止、早期発見、早期対応をするために、学校と関係機関との連携強化が図られ、さらには相談体制の充実、また以前には見られなかった「ネット上のいじめ」への対応も強く推し進められてきている<sup>1)</sup>。

## III. 神奈川県における取り組み

### 1. 『かながわ教育ビジョン』について

神奈川県は、県教育委員会が中心となって「かながわ教育ビジョン」策定を目指し、平成17(2005)年11月から翌18(2006)年11月までに、かながわ人づくりフォーラム3回、それ以外にワークショップ19回、教育イベント4回を開催し、多くの県民や教育関係者と議論を交わし、平成18(2006)年8月に「かながわ教育ビジョンに関する提言」を取りまとめた。そこでは、大きなテーマとして、「地域・家庭・学校 つむぐ おりなすかながわの人づくり」を掲げ、「育てる思いを重ね合う、持ち味や役割が響き合う、学び合う、学び続ける」というスローガンのもと、3つの柱、8つの視点、24の提言を示した<sup>3)</sup>。3つの柱には、

①地域に根ざした新たな教育コミュニティづくり、  
②みんなで子育て・家庭教育を支える社会づくり、  
③子どもが成長する場としての学校づくりが掲げられた。その後もかながわ教育ビジョンの策定に向けて意見交換を重ね、平成 19（2007）年 7 月に「かながわ教育ビジョン」の最終案がまとめられ、「心ふれあうしなやかな人づくり」が提唱された。

## 2. かながわ子どもスマイル（SMILE）

### ウェーブ

「かながわ教育ビジョン」が提唱する「心ふれあうしなやかな人づくり」を目指し、県教育委員会教育局支援教育部学校支援課では「かながわ子どもスマイル（SMILE）ウェーブ実行委員会」が平成 24（2012）年に構成された。委員会における目的は、当時の社会問題の 1 つであった子どものいじめや暴力行為等を防ぎ、地域の大人たちが子どもを守り、支えていく気運を醸成していくことである。神奈川県は文部科学省調査<sup>1)</sup>によると、いじめの認知件数は 47 都道府県の中で、ワースト 8 位であった。そこで県民参加型の事業を通して、子どもたちに笑顔を、学校に笑顔をもたらすことを目指し、神奈川県子ども会連絡協議会、神奈川県少年補導員連絡協議会や神奈川県警察本部など、20 団体によってかながわ子どもスマイル（SMILE）ウェーブ実行委員会が設立された。また構成団体の中には 5 つの県内大学が含まれ、東海大学はその 1 つであった。

SMILE の S は Support を表し、子どもの育ちを支援するため、思いやりのある関わりを深めることを、M は Magnet で、みんなの笑顔のために地域のつながり、行動の輪を広げることを、I は Interest で、子どもの育ちに関心を持ち、子どもたちと共に学ぶことを、L は Life で、一人ひとりの絆を深め、互いの命を守り、育むことを、E は Enjoy で、子どもの活動を支えながら、大人も楽しんで取り組むことを意味する<sup>4)</sup>。この SMILE を念頭に置きながら、かながわスマイル（SMILE）ウェーブの取り組みの 1 つに県民参加型事業として大学生と子どもの交流モデル事業の実施等に関する要綱が提示され、構成団体の 5 大学が大学生と子どもの交流を通じて、若者と子どもの双方に、

自分がどれだけ大切な存在であるかということを確認させることを目的に、大学生と地域の絆づくりに役立つ事業を展開した。

## IV. 東海大学における取り組み

### 1. 大学生と子どもの交流モデル事業

#### 1) 委託依頼から委託申請まで

委託事業は、2012 年 5 月頃に神奈川県教育委員会から東海大学体育学部教員に直接依頼があった。これ以降、スポーツ・レジャーマネジメント学科教員 1 名を経由し、この事業に取り組むことができそうな体育学部教員 2 名（生涯スポーツ学科教員 1 名、スポーツ・レジャーマネジメント学科 1 名）に対し、具体的な依頼内容の話が交わされた。支給金額が 20 万円であること、支給対象事業は 2012 年 8 月 1 日（水）以降に実施され、2013 年 1 月 31 日（木）までに完了すること、支給申請書の提出が 2012 年 6 月 29 日（金）であることなどであった。これを受け、交流モデル事業を進めるためには学生の協力が必須であり、至急学生を募ることとした。

大学生と子どもの交流という点から考えると、東海大学では生涯スポーツ学科とスポーツ・レジャーマネジメント学科の学生が事業にふさわしいと考えられた。生涯スポーツ学科は、「幼児から高齢者までのスポーツ理論」や「子どもと遊び演習」などの講義や体験授業を通して、子どもの指導方を学ぶ機会がある。またスポーツ・レジャーマネジメント学科は、イベントの企画（少年野球大会や東海大学学園オリンピックなど）で常に「参加者の視点」を大事にし、「受け手が満足したり、喜んだり、また来たい」と思うようなプログラミングのスキルを、講義と実践から得られる機会が豊富であるからである。

両学科の特徴を考慮し、2 学科から募集した結果、10 名の学生有志が集まり、彼らが活動の中心的な存在となった。申請書を作成するにあたって、教員 2 名と中心的役割を担う学生 10 名とで、①活動趣意書の作成、②企画概要として、目的、主催、協力、顧問、対象、活動場所、参加費用、全体費用、学生スタッフ、事業スケジュールの決定をした。まず活動趣意書の作成に取り掛かる前に、

応募内容の理由を具体的に考え、「1 つ目は東海大学湘南校舎が野外活動場所や人工芝で整備されたラグビー場など多くのスポーツ施設を所有していること、2 つ目は東海大学体育学部には野外活動やレクリエーション活動の指導を専門に学ぶ学科と、スポーツ&レジャーの現場におけるマネジメントを学ぶ学科があること、3 つ目は上記の内容から物的資源と人的資源があり、地域の子どもたちが伸び伸びと活動できるためのサポートとなる豊かな資源が揃っていること」とした。

次に活動趣意書の作成に当たっては、「ここに新しい居場所を」をスローガンに掲げ、大学生と地域の子どもたちがスポーツやレクリエーション活動、野外活動を通して、お互いの存在を確認し、さらには新しい居場所づくりに役立て、複数の居場所を持つことが子どもたちを取り巻く問題の解決策の1つになることを謳った。さらに学生中心の活動を実施することから、学生と言えども責任ある行動を全うし、活動企画を実施し、スポーツやレジャーの価値を広げ、参加者にとってかけがえない時間と経験の場になることを記した。

最後に企画概要を手掛ける際、活動趣意書のスローガンを念頭に置き、テーマを「地域の子どもたちの居場所づくり」とし、目的は大学生と地域の子どもたち（いじめや不登校の経験を持つ生徒を含む）がスポーツやレクリエーション活動、野外活動を通してお互いの存在を確認し、さらにはそれぞれの新しい居場所づくりに役立てることとした。主催は東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科、協力は同大学同学部生涯スポーツ学科、顧問はスポーツ・レジャーマネジメント学科から2名、生涯スポーツ学科から1名とした。対象は東海大学周辺に住む小学生と中学生の30名、この中にはいじめや不登校、暴力等の経験を持つ生徒を含むこと、活動事業によっては参加者の保護者も含まれるようにした。活動場所は主に東海大学湘南校舎内、静岡県朝霧高原（授業で使用経験あり）、新潟県南魚沼市（体育学部元教員がゼネラルマネジャー）を選択した。参加費用は保険代として活動6回で4,500円程度（単発型が1回500円、宿泊型が1回700円程度）、宿泊型事業は保険代700円を含めて参加費約

25,000円とした。学生スタッフはスポーツ・レジャーマネジメント学科と生涯スポーツ学科の学生とした。事業スケジュール案は表1の通りである。

表1 2012年度事業スケジュール案

	日付	曜日	時間	場所	内容
1	8月18日	土	10時～12時	湘南校舎	東海大学探検ウォークラリー
2	9月1日	土	10時～12時	湘南校舎	プールで水遊び
3	9月22日	土	10時～12時	湘南校舎	アウトドアクッキング&ニュースポーツ
4	10月13日、14日	土日	1泊2日	静岡県朝霧高原	ふじさんのんびりキャンプ
5	11月10日	土	9時半～15時	湘南校舎	ツリーイング
6	12月15日	土	18時～21時	弘法山	ナイトラリー
7	1月12日～14日	土日月	2泊3日	新潟県南魚沼市	雪国キャンプ

このように活動趣意書と企画概要を作成し、仮の団体名を「東海大学キッズクラブ」とし、2012年6月27日（水）に「かながわ子どもスマイル（SMILE）ウェーブ県民参加型事業 大学生とこどもの交流モデル事業委託申請書と見積書（1事業20万円上限）の提出にこぎつけた。申請内容が受理され、2012年8月31日付けで、神奈川県知事の黒岩祐治氏名で委託費支給決定通知書をいただき、20万円が支給された。

## 2) 委託申請後の活動の実態

委託申請後は、学生スタッフ（希望者を含む）と教員のミーティングの機会を7月12日、26日と2回設けた。ミーティングの内容は、①組織づくり（学生スタッフ募集を含む）、②団体名の変更とロゴマークの作成、③広報活動の具体的な方法、④実際の活動と見直しであった。

組織は図1の通り、事務局・統括の下に、組織マネジメントの役割を担う、庶務、会計、広報、スタッフ管理を配置し、プログラム、チューターを具体的な活動に関わる役割として配置した。プログラムについては、単発型（DAYプログラム）と宿泊型（キャンプ）の2つに分けて、人員を配置することにした。

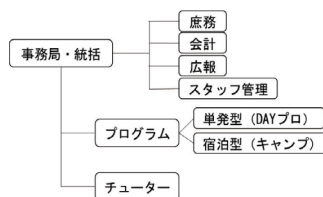


図1 学生スタッフ組織図

活動始動期は、申請書の作成を教員と共に考案した学生 10 名を含めて、合計 50 名の学生有志が集まった。

団体名は学生スタッフから意見を募り、「東海大学キッズクラブ」から“笑顔”というキーワードを取り入れて、「Tokai Smile<sup>2</sup> Factory」と変更した。ロゴマークは図 2 の通り、大学生と子どもたちが互いに影響しあい、新たに車輪が回り始めることを“新しい居場所”に連想させて作成した。



図 2 ロゴマーク

広報活動については、まず神奈川県教育委員会教育局支援教育部 学校支援課県立学校生徒指導グループ指導主事であり、この事業を取り組むきっかけとなった方に電話相談した。なぜなら「かながわ子どもスマイル (SMILE) ウェーブ県民参加型事業 大学生とこどもの交流モデル事業」は、子どもたち間でのいじめが社会問題として取り上げられ、東海大学における事業展開の対象を、大学周辺に住む小学生と中学生 30 名とし、いじめや不登校、暴力等の問題を抱える子どもたちを含めることにしていたからである。問い合わせの具体的な内容は、対象となる子どもたちに直接この活動の存在を伝えるためには、どのような場所に広報をすればよいかということである。返答は「いじめや不登校、暴力等のサポートに関わる団体は把握していず、ピンポイントで呼びかけるのは難しい。今たとえ元気な子であってもいつ加害者になるか被害者になるか分からない。したがって、予防対策としてこの事業を捉えてはどうか。さらにこの事業に関しては県教育委員会から各市町村教育委員会並びに小・中学校に事業趣旨を伝えている。社会福祉協議会や公民館を当たってみてはどうか」という内容であった。

このアドバイスを踏まえて、社会福祉法人秦野市社会福祉協議会に電話相談をした。暴力・いじめ・不登校に悩む子どもたちのボランティア団体や組織、NPO 法人を把握していないか、という質問に対して、社会福祉協議会の返答は、これらの

団体などとのつながりはないが、事務局がある施設内でポスターの掲示やチラシの配布はできるということであった。これら 2 か所におけるやり取りを通じて、対象とする子どもたちに活動の存在を知り得るまでに時間を要することや、たとえ認知したとしても活動に参加するに至るまでに当人の意識が重要であることが分かることとなった。

他に、秦野市くらし安心課人権推進課人権・同和班に連絡を取り、行政機関内の関係部署を尋ねると、「適応指導教室 いずみ」が市役所内教育研究所、「いじめ・不登校問題担当」市役所内秦野教育指導課、「こども家庭相談担当」保健福祉センター内健康子育て課子ども家庭相談班、「青少年育成指導担当」はだのこども館内こども育成課があると情報を提供してもらった。これらの情報を考慮し、広報活動を具体的に展開した。ポスター掲示とチラシ配布先を社会福祉法人秦野市社会福祉協議会と適応指導教室 いずみ内の悩みを抱えるこどものための教室、秦野市保健福祉センター内のいじめ・不登校等の相談場所 市子ども家庭相談班の 3 か所に決定した。図 3 は協力場所に掲示・配布したポスター兼チラシ（実際はカラー刷り）である。



図 3 ポスター兼チラシ

このように組織づくりと広報活動の方法について一歩一歩進めていたが、参加者が集まらず、事業スケジュール案中の第 1 回目 8 月 18 日、第 2 回目 9 月 1 日は中止せざるを得ない状況となった。そこで、9 月中旬に再度ミーティングを開き、広報活動について現状と課題の分析を行った。その結果、①広報活動エリアを拡大すること、②ポスターやチラシの配布依頼だけでなく、直接現場に出向きこの活動の趣旨を自ら伝えたいうで、掲示や配布をすること、③秦野市の広報誌への協力依

頼をすることをつけ加えた。エリアの拡大は、秦野市以外に平塚市、伊勢原市を含め、平塚市子ども教育センター、平塚市子ども教育センター適応指導教育、少年相談保護センター 湘南方面事務所（平塚）、NPO 法人そだちサポートセンター（平塚）、伊勢原市教育センターを広報活動場所として追加した。また秦野市役所企画課に相談を持ち掛けると、大学周辺で子どもたちにスポーツを教えている方を紹介していただき、連絡を取ることができるようになった。さらに活動の様子を、TVK（テレビ神奈川）の神奈川県紹介番組「かなふるTV」で取り上げていただくことになり、取材を受けることが決定した。

実際の活動は先にも述べたが、広報活動不足等による参加者なしの状況が 2 回続いたことから、事業スケジュール並びに内容の見直しを図ることになった。表 2 が実際に中止に至った活動、追加された活動、内容の変更を伴った活動を含めた 2012 年度の最終的な事業スケジュールである。

表 2 2012 年度事業スケジュール（実際）

	日付	曜日	時間	場所	内容	実際（理由）
×	8月18日	土	10時～12時	湘南校舎	東海大学 探検ウォークラリー	中止 (参加者集まらず)
×	9月1日	土	10時～12時	湘南校舎	プールで水遊び	中止 (参加者集まらず)
1	9月22日	土	10時～12時	湘南校舎	アウトドアクッキング & ニュースポーツ	実施 (参加者4名)
×	10月13日、14日	土日	1泊2日	静岡県 朝霧高原	ふじさん のんびりキャンプ	中止 (参加者集まらず)
2	11月10日	土	9時半～15時	湘南校舎	ツリーイング	実施 (参加者17名)
3	12月1日	土	10時～15時	湘南校舎	遊び王！東海 大学内のスポーツ施設 を遊んでたくさん遊ぶ	追加実施 (参加者12名)
4	12月2日	日	10時～15時	湘南校舎	遊び王！東海 大学内のスポーツ施設 を遊んでたくさん遊ぶ	追加実施 (参加者18名)
5	12月15日	土	14時～17時 18時～19時	辻浜山 湘南校舎	クリスマス 手作り クリスマスパーティー 大学生や友達と一緒に クリスマスパーティー を手作りする	変更実施 (参加者26名) 子ども18名 大人8名
6	1月12日～14日	土日月	2泊3日	新潟県 南魚沼市	雪国キャンプ	実施 (参加者12名)

事業スケジュールの見直しに伴い、神奈川県知事宛に「かながわ子どもスマイル (SMILE) ウェーブ県民参加型事業 大学生と子どもの交流モデル委託事業計画変更申請書」を提出した。具体的には当初事業計画で計 7 回（単発型 5 回、宿泊型 2 回）の事業を展開する予定から、計 6 回（単発型 5 回、宿泊型 1 回）に、委託支給額 20 万円の前算立ても併せて変更することとした。

## 2. Tokai Smile<sup>2</sup> Factory としての活動

### 1) 2 年目以降の活動に向けて

委託事業期間が終わり、2 年目以降の活動に対して、振り返りと課題の洗い出しを行った。1 年目の参加者数は、第 1 回目（9 月）が 4 名、第 2 回目（11 月）が 17 名、第 3 回目（12 月）が 12 名、第 4 回目（12 月）18 名、第 5 回目（12 月）が 26 名、第 6 回目（1 月）が 12 名であった。当初は広報活動の影響もあり、東海大学周辺地域における活動の認知があまりされていなかったが、徐々にこの活動の存在が認識され始めていたことが、参加者数の増加に繋がっていた。

委託事業から始まった活動ではあるが、参加者が増加してきていること、またリピーターが数名いることを考慮すると、委託支給金が無くなったとはいえ、活動を止めることはできないという認識に達していた。けれどもあくまでもこの活動は、学生スタッフが中心となって実施するものとしていたため、彼らの意志を確認する必要があった。また参加者の中にいじめや不登校、暴力等の問題を抱えている子どもが含まれているかどうかはこれまでの活動を通して知ることはできなかった。しかしこの問題に関しては、当事者の人数を把握した上での活動することが目的ではないので、始動期にアドバイスをいただいたように、あくまでもそれらの問題の予防策を捉え今後も活動していくことが大切であるということを再認識した。

これらを踏まえて、2 年目以降の Tokai Smile<sup>2</sup> Factory としての活動は、委託事業活動当初から掲げているテーマ「ここに新しい居場所を～地域の子どもたちの居場所づくり」をもとに、その目的は大学生と地域の子どもたち（いじめや不登校の経験を持つ生徒を含む）がスポーツやレクリエーション活動、野外活動を通してお互いの存在を確認し、さらにはそれぞれの新しい居場所づくりに役立てることであり、それを念頭におきながら、活動を継続する結論を下した。学生スタッフと教員とでミーティングを開き、子どもたちがたくさん居場所を持つことによって、様々な人たちと交流をし、それを通して、自分自身の成長につなげてほしいという思いを持ち、責任ある行動を継続していくことを胸にとどめ、今後も活動を継続



することで志を一致させた。

だが課題が1つあった。それは活動費用である。1年目の計6回の活動中、単発型では保険代と雑費（活動に必要な道具の購入）として500円を、宿泊型ではバス代、宿泊代、食費、保険代を含めて25,000円を参加費としていた。とくに宿泊型におけるこの金額は、参加者本人最低限の必要経費であり、学生スタッフは参加者とほぼ同額に近い金額を各自支払う必要があった。委託事業期間は委託支給金20万円で補填することができたが、2年目以降はこの資金が無くなるため、活動内容と活動方法について再検討することが必須となった。

## 2) 2年目～6年目の活動場所とその内容

2年目から6年目にかけては、毎月1回の活動を実施し、年間12回の活動を継続している。そのうち、1月と8月は2泊3日のキャンプを、それ以外の月は、基本的に東海大学湘南キャンパス内のスポーツ施設を利用している。表3は活動場所と活動内容をまとめたものである。

表3 活動場所とその内容（2年目～6年目）

年次	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月			
	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容		
1年	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び	単発型	雪遊び
2年				ラグビー	サッカー	バスケット	バレーボール	卓球	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書	内遊び	読書
3年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
4年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
5年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
6年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
7年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
8年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
9年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
10年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
11年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ
12年				ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ	ヨガ

2013年2月～6月、2014年2月～5月、2015年4月、2016年5～6月の活動場所と活動内容の記載がないのは、活動記録をしなかったことと、活動の様子を撮影した写真等の記録が残っていないためである。活動場所と活動内容の中にはほぼ固定しているものがある。1月の2泊3日のキャンプは毎年1月の3連休に東海大学湘南校舎内のログハウス前で雪遊びを実施している。リピーターの参加者の中にはスキーをやってほしいという希望もあるが、学生スタッフの人数とスキー技能並びに指

導に関して不安があるため、これまでは実施していない。具体的な活動は、雪上ラグビーやそり遊び、かまくらづくり、雪だるまつくり、星空観察、室内でのカードゲーム大会などである（写真1）。8月の2泊3日のキャンプは毎年8月20日以降に実施している。2013年～2015年は湘南校舎内の野球場にテント泊をし、ボール遊びなどの外遊び、15号館プールでの水遊び、雨天の場合は総合実験室での室内遊び、そして野外炊事とキャンプファイヤー



写真1 東海大学湘南校舎内所有のグラウンドでの雪上ラグビー

を行った。しかしこの時期の大学周辺はととても蒸し暑く、テント泊をするのにあまりふさわしくないということから、2016年以降は山梨県の富士五湖の1つである西湖のそばにある紅葉台キャンプ場で実施している。このキャンプ場はキャビンがあり、野外炊事場も非常に使いやすく、少人数で野球ができる



写真2 富士五湖西湖でのカヌー体験

くらいの広場兼駐車場がある。また西湖ではカヌーやカヤックを体験できる（写真2）。子どもたちにとって、快適に就寝できることは翌日の活動に大きく影響するため、とても良い環境である。11月は、2014年以降毎年、湘南校舎内のログハウス前にあるけやきの森でツリーイングを実施している（写真3）。11月頃になると紅葉した葉が落ち始め木々の間に隙間が生まれる。そこにロープをたらし、ロープ

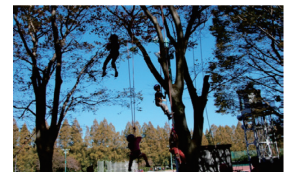


写真3 湘南校舎ログハウス前けやきの森でのツリーイング

を手繰り寄せながら、木に登る。また落ち葉が広がる地面は、単に土がむき出しになっている状態とは異なり、遊びの幅が広がる。季節の移ろいを生かした湘南校舎内ならではの活動である。12月

は、2012年当初からクリスマス会を実施している。2013年以降は総合実験室内に飾り付けをし、身体を動かす場所と創作活動ができるスペースに分けて活動をしている。その日の活動の最後に、学生スタッフのアイデアから、毎年プレゼントを子どもたちに渡している。6月、7月の活動は、近年の高い気温から15号館プールでの水遊びを増やしている。子どもたちにとってお気に入りの場所の1つに柔道場がある。それは裸足で思いっきり走ったり、ボール遊びをしたり、マットを使って飛んだり跳ねたり、思い思いに身体を動かすことができるからである（写真4）。



写真4 湘南校舎柔道場での室内遊び

2018年からは子どもたちだけでなく、積極的に保護者の方にも参加してもらってはどうかという考えから、湘南校舎からあまり遠くない施設であることと参加者の方々が在住する地域内を考慮し、3月には伊勢原ボウリング場でボウリングを、5月には清川リバーランドでバーベキューを実施し、保護者の方々も多数参加した。

### 3) 2年目～6年目の参加者数と延べ人数の推移

活動2年目にあたる2013年の参加者数と延べ人数の記録が残っていないため、図4は、活動2014年（活動3年目）から2018年9月（活動6年目）までの毎月の参加者数と年間の延べ人数の推移である。折れ線グラフが毎月の参加者数であり、棒グラフが年間の延べ人数である。

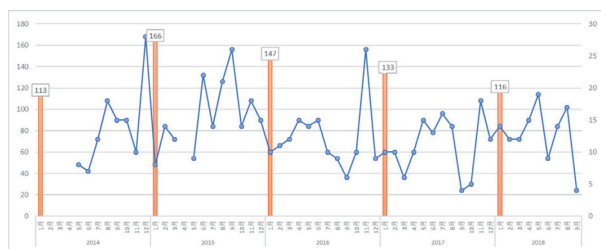


図4 毎月の参加者数と年間延べ人数の推移

活動4年目の2015年の延べ人数は166名であ

り、6年間のうち最も多い数字であった。それ以降は少しずつ減少傾向にある。毎月の参加者数は増減の幅があり、活動月によっては学校行事と重なってしまったために、人数が少なかったことがあった。最も多いときは30名弱程度集まったが、参加者数の毎月の平均は13名である。13名の中に、2012年から2018年4月まで、ほぼ毎回、参加してくれた子どもが4名含まれる。4名は2018年4月に中学生となり、現在は活動に参加する機会が減っているが、それぞれ2018年の活動に2～3回ぐらい参加している。兄弟姉妹がいると、兄や姉の影響を受けて、その妹や弟が参加するようになっている。このように兄弟姉妹で参加しながら、それぞれの友だちや親同士のつながりなどで、参加者が集まっている。

## V. 結果及び考察

### 1. 交流モデル事業から

#### Tokai Smile<sup>2</sup> Factoryの活動を通して

##### 1) 活動目的の変化

2012年5月に神奈川県教育委員会から東海大学に依頼があり、「かながわ子どもスマイル（SMILE）ウェーブ県民参加型事業 大学生とこどもの交流モデル事業」を、その年の8月から翌（2013）年1月の半年間、活動を実施してきた。「ここに新しい居場所を」をスローガンとし、大学生と地域の子どもの子どもたちがスポーツやレクリエーション活動、野外活動を通して、お互いの存在を確認し、さらには新しい居場所づくりに役立てることを目的とし、複数の居場所を持つことが子どもたちを取り巻く問題の解決策の手助けとなることを念頭に置いて活動することを志していた。また学生中心の活動であるからこそ、責任ある行動を全うし、活動企画を実施し、スポーツやレジャーの価値を広げ、参加者にとってかけがえのない時間と経験の場になることを学生スタッフ間で共有してきた。それは当時、子どもたちの間で、いじめや不登校、暴力行為など社会問題の1つとして取り上げられ、神奈川県においても無視できない状況であったからである。

そこで組織構成時に中心な行動をとった学生有志10名が高い意識を持ち、それ以降に集まっ



た学生スタッフにもその思いを伝え、ともに行動してきた。その10名の中には、自らも小・中学校時代にいじめ経験がある学生がいた。そのようなこともあり、活動のスローガンそして目的、活動に対する真剣な姿勢が伝わる内容の活動をしていた。また2学科の学生が存在していたことで、組織運営のマネジメントも子どもたちと一緒に遊ぶことも、バランスよく活動ができていた。

しかし2016年3月に卒業した学生を最後に、4月以降は、1学科の学生たちが主に活動を継続していくことになった。この時期を境目に、活動目的が当初のものから「大学生と子どもの“遊び力”を高めること、大学生と子どもたちが“遊び”を通して、心と体の良い刺激となるプログラムを企画・運営する」ということになっていくことになった。

学生の学びとなる場であることは当時から変わらないが、遊びのプログラムだけでなく、目的が変化する以前は、子どもたちへの接し方、保護者との関わりあいなどを通して、子どもたちにとって居心地がよく、いつでも受け入れてくれる居場所となるような活動そのものの運営を心掛ける姿勢が全学生スタッフから感じられた。例えば、毎週1回の学生のみでの定例会を実施し、遊びの内容の充実に向けた事前の練習や、毎月1回の活動における学生の役割など入念な打ち合わせとシミュレーションを行っていた。また保護者との電話やメール、手紙などの丁寧なやり取り、活動当日のコミュニケーションなど、学生の立場で最大限できることを、学生同士それぞれの意見を真剣に交わしながら、活動に対して真摯に取り組んできた。これらのような活動に対する取り組みが、活動目的の変化があつてから、少しずつ薄れてきた。

活動を継続していくうえでもその方向性を示す活動目的は重要である。活動内容に合わせた目的にするのか、それとも目的に合わせた活動内容にするのかでは活動の質や活動姿勢が大きく異なると考える。改めて活動目的に沿った活動内容にするために組織内での十分な意見交換が必要である。

## 2) 継続していくための活動資金

これまでの活動では、参加者から活動経費にかかわる費用として、単発型は主に保険代と材料代を、宿泊型は保険代、食費代、宿泊代、交通費などを支払っていただいていた。この状況では、単発型の活動の際は問題ないが、宿泊型の場合は移動手段としてバスを借りることは難しく、現地まで電車で移動することを余儀なくしてきた。また学生スタッフが、個人で、移動費や宿泊費などを支払わざるを得ず、彼らに資金面での負担がかなり掛かってしまう状態であった。また大学周辺地域においては、このような活動に対する費用は25,000円が設定の上限であり、兄弟姉妹で家族3名が参加した場合、75,000円の出費はその家族にとって大きな負担となる。それでも参加者の費用だけではバスを借りることはできないため、移動手段の検討が必要な状況であった。そのため、学生スタッフの負担額も減少する兆しはあまり見えない。

活動継続に向けては、一つは活動資金を補助金などに頼るか、もう一つは活動資金の身の丈に合った活動を展開していかである。さらには参加者数を増やすことが求められると考える。

## 3) 参加者への活動の告知（広報）について

単発型の活動日はほぼ毎月第3土曜日に行っている。活動終了時には翌月の活動日の告知をする。その後活動場所が決定でき次第、そのお知らせをメールで情報提供している。活動場所によっては活動内容が限定される場合もあるので、その時は合わせて内容も伝えている。

活動日に関しては、毎年3月の活動終了時に4月以降の活動日を確認し、年間通して計画を立てている。しかし活動場所の確保がスムーズに進まないことで、参加者への周知が遅れてしまうことや、子どもたちの学校行事と重なると、参加者が集まらず、この状況が続くことで、少しずつ参加者が減ってしまう状況を生み出していることが考えられる。

Tokai Smile<sup>2</sup> Factoryの活動は、活動に参加している保護者と子どもたちとスタッフ（学生と教

員)の信用と信頼のもとに、参加者の方々の口コミのみの広報活動を行っている。それはこの団体の活動が、子どもたちにとっても学生たちにとっても、さらには保護者にとっても、一緒に活動を通して学び続ける、学びの場であるからである。この趣旨を理解し、活動に子どもたちを参加させている保護者によって、新しい参加者が安心して子どもたちを送り出してくれる循環型の活動運営を目指しているが、参加者が減少すると Tokai Smile<sup>2</sup> Factory は、活動意義はあっても、活動そのものが成り立たなくなる。

参加者側に立ったうえで、いつ、どのタイミングで活動の告知を得たいか改めて検討することが必要であると考え。そのために、事前に保護者からあらかじめ学校で開催される公的な行事をお聞きし、活動場所の確保をできるだけスムーズに行えるように毎月の活動終了時から翌月の活動場所の検討をするのではなく、1・2 か月分の活動を同時進行で進めていくなどの工夫をすることなどが求められると考える。

#### 4) 学生スタッフが関わる メリットとデメリット

Tokai Smile<sup>2</sup> Factory の活動に学生スタッフが関わる最大のメリットは、子どもたちとの関わりである。子どもたちにとって学生は、親でもなく、身内でもなく、学校の先生でもなく、単純に一緒に遊んでくれるお兄さんであり、お姉さんという存在である。良き遊び相手であり、話し相手であり、リピーターの子どもたちにとっては、兄弟姉妹のような感じでもある。子どもたちは毎月1回の活動のなかで、普段と異なる時間を学生と共有している。日常とは離れた別の場所で、それぞれにとって居心地の良い時間を過ごしているのである。またその場は、子どもたちにとって、学生にとって学びの場であり、遊びを通して、他人とのかかわり方を肌で感じ取り、常に学習している。例えば、時に子どもたちは学生を召使いのように扱ってしまうことがある。その場合は、すぐに子どもたちに対して、「大学生は召使いではないこと」を学生本人からきちんと子どもたちに説明をする。また他人が嫌がることをした時は、やられた相手

にとってその行為がなぜ嫌なのか、子どもたちが分かるまで学生が向き合って話をすることもある。遊び以外にもこのようなやりとりを通して、それぞれが成長していくことにつながる。もう1つのメリットは、保護者と子どもたちのつなぎ役である。子どもたちは、活動の中で、家庭では見られない姿を見せることもある。とくに宿泊型の活動をしているときは、学生の誕生日のお祝いを子どもたちが企画し、実施したことがあった。自ら考え、周囲の仲間にコミュニケーションを通して巻き込み、サプライズ企画をしている様子は保護者にとっては、新鮮な場面であるかもしれない。また水遊びや雪遊びをしている際の、夢中で真剣な表情や張り切った行動は、家庭内では見られないだろう。2泊3日の中では活動だけでなく、学生スタッフとの何気ない会話の中から、保護者が思ってもみない発言が交わされていることもある。これらを保護者に学生自身の言葉で伝えることによって、保護者達は普段の生活では見ることのできない、子どもたちの別の一面を知り、子どもたちを見る目が少し変わるようである。そしてそれを聞いた学生は、さらに真剣に子どもたちの様子を観察するようになり、良い循環が生まれ、学生と子どもたち、保護者と信頼関係が深まり、安心感のある活動場所に自然となっていくのである。

一方で、学生によるデメリットの1つ目は、4年間というサイクルで、学生が卒業し、新メンバーが加わるというように、メンバーの入れ替わりが起きることである。学生間で、活動の趣旨や目的が十分に伝わらないと、学生の活動に対する姿勢や行為など、活動そのもの、つまりは参加者である子どもたちやその保護者に影響を及ぼしかねない。そのためには学生に、Tokai Smile<sup>2</sup> Factory が始まった経緯を認識する機会や学習する場が大切である。これらが、学生たちの参加者に対する責任ある活動の提供と行為につながる。6年間目的が変化した理由はここにあると考えることができる。2つ目は、学生によって、授業やクラブなどと、Tokai Smile<sup>2</sup> Factory の活動の優先順位が様々であり、異なることである。これは活動目的などの理解が乏しいことにも関わるが、往々にして、子どもたちの活動がないがしろになってし

まうこともある。子どもたちがどのような思いで活動に参加してきているのか、それを十分に考えることをせずに、自身の行動をしてしまうことにつながる。3つ目は、すぐに結果につながらないことへの消極的な態度である。新しいもの生み出したり、経験の蓄積が自らの力の糧になるまでには、多くの時間を要しすぐに結果はでない。遊びの内容は自身が経験していないとなかなかアイデアが浮かばない。また子どもたちの様子を観察しながら、その場で遊びを一緒に創り出すのは難しい。これを繰り返していくうちに、徐々に慣れ、アイデアが湧いてくる。学生にとっては、この段階に至るまで活動を継続できるかどうか、自身の成長や学びへの鍵となる。宿泊を伴うキャンプは、遊びだけでなく、寝食を共にしながら2日間生活する。思いがけないことが起きたりする場合もある。その際の対応を事前にシミュレーションしたり、話し合ったり、先のことに見通しを立てながら準備することは経験が必要となる。このように、新しい遊びを考えたり、経験から学ぶ取るような時間を費やす活動は、すぐに結果を求めがちな学生にとっては困難なことの1つであるようである。

学生にとって、大学生活の中で同世代の仲間ではなく世代の異なる人と関わることは自身の成長にもつながる。そのうえで、1. 学生自身が子どもたちやその保護者と関わる意義を理解し活動を行うこと、2. 活動に携われる期間は最長でも4年という限度があること、3. 学業以外のボランティア活動であること、4. 対人活動では明確な答えがなく経験から学ぶということ、これら4点を念頭に入れて活動することが大切である。またいずれも学生自身にとって、組織にとって、子どもたちや保護者にとって、メリットにもデメリットにもつながることを意識した行動をとることが活動継続に向けてより重要なポイントであると考ええる。

## VI. まとめ

Tokai Smile<sup>2</sup> Factoryの学生スタッフが中心となって実施する活動は、委託事業期間を含めて6年間が過ぎ、2018年9月から7年目に入った。

これまでの活動経緯を振り返ることで、改めて、活動の原点を再確認することができた。活動を展開していく中で、活動場所や活動内容の定着化、さらには新たな試みが明確になった。活動費用の設定に関しては、活動そのものと広報との兼ね合いが浮き彫りになった。今後も注意深くそれらの状況を見極めながら、実施していく必要がある。学生スタッフが中心となってきたことによる意義は十分にある。学生スタッフがもたらす子どもたちとその保護者への影響は、メリットもデメリットもある。デメリットは一概に悪いことではなく、学生スタッフが関与するからこそ生まれてくることでもあり、前向きにとらえれば、それを改善していくことで、今後も自信をもって継続して実施できる活動であると言える。

## 文献・資料

- 1) 平成24年度文部科学省(2013)文部科学省省白書,日経印刷株式会社,p.28.
- 2) 政府統計名「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸活動に関する調査」政府統計の総合窓口(e-Stat)のホームページ <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/> 閲覧日2018年12月1日.
- 3) かながわ教育ビジョン「心ふれあうしなやかな人づくり」神奈川県教育委員会ホームページ <http://www.pref.kanagawa.jp> 掲載日2018年8月30日,閲覧日2018年12月10日.
- 4) かながわ子どもスマイルウェブちらし,神奈川県教育委員会教育局支援教育部学校支援課,平成24年11月発行.